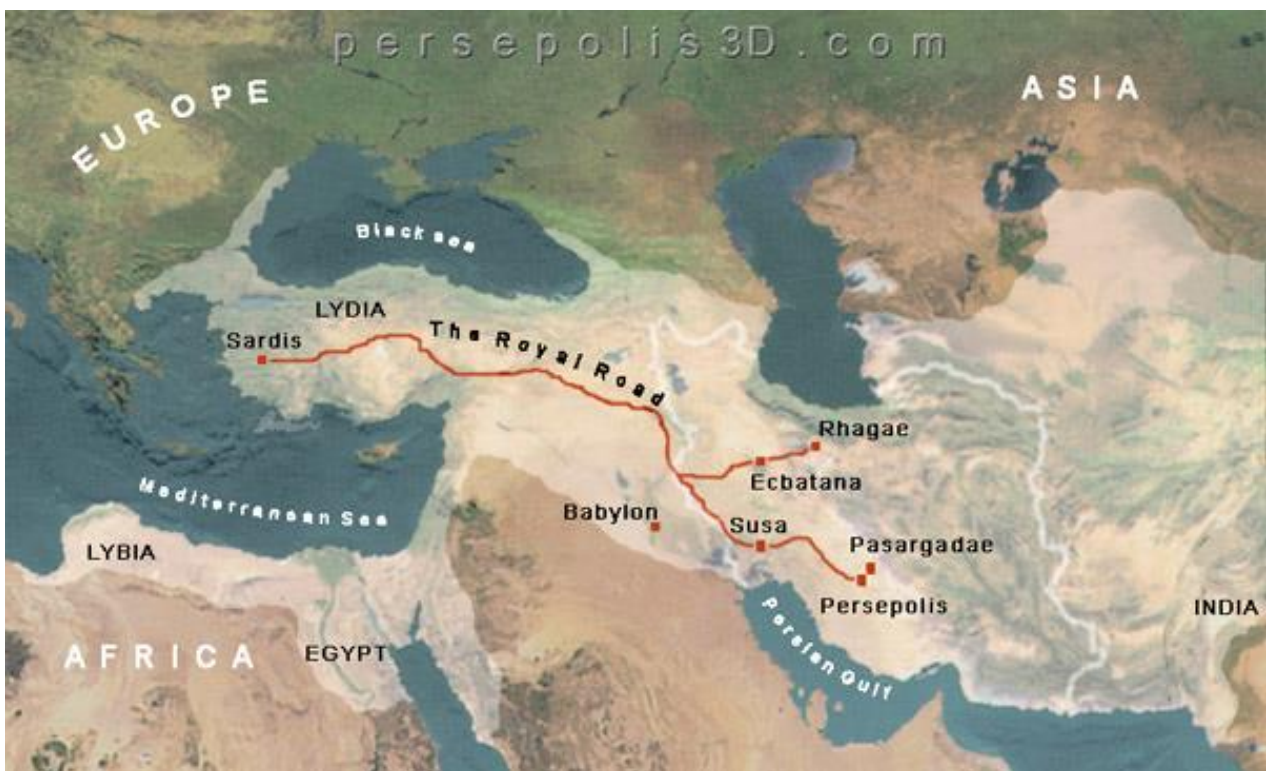


ペルセポリスを見る③

ペルセポリスというのはギリシア語で、「ペルシアの都市」という意味です。当時、ペルシア語で何と呼んでいたのかはわかりません。現在イランでは、**タフテ=ジャムシード**と呼んでいます。「ジャムシード王の玉座」という意味です。ジャムシード王というのは、イラン版『古事記』である『**シャー=ナーム(王の書)**』に登場する、神話時代の王。名君でしたが、次第に傲慢になって神に見捨てられ、アラブ人の王に殺されるという話になっています。アケメネス朝の滅亡後、その記憶は薄れていき、ペルセポリスが何の遺跡なのか、わからなくなっていたのです。

19世紀、英国の軍人**ローリンソン**が楔形文字の解読に成功し、発掘調査も行われ、ここがアケメネス朝の都であることが明らかになりました。20世紀、イギリス・ロシアの侵略に抗して民族主義が高揚した**パフレヴィー朝**の時代には、「栄光のペルシア帝国」が政治宣伝に利用され、**1971年**にはここで、「**ペルシア建国2500年式典**」が行われました。この式典で得意の絶頂だった国王**パフレヴィー2世**は、8年後のイラン革命でホメイニに倒されることになります。イスラム革命政権は、イスラム以前のアケメネス朝には興味がないようです。イスラム教では、イスラム以前の時代を暗黒時代とみる一方、民族の枠を超えたイスラム共同体を重視するからです。

しかし何人かのイラン人に聞いてみて、彼らに最も誇りに思っているのは、今もアケメネス朝だということがわかりました。エジプト・ギリシアからインダス川まで支配したアケメネス朝ペルシアが、イランの栄光の時代なのです。イラン人の自己認識(アイデンティティ)は、まず**イラン人(ファールスィ)**であること、その次が、**イスラム教シーア派**であることのようにです。



▲ アケメネス朝の最大領土。白枠が、現在のイラン。 <http://persepolis3d.com/>

紀元前550年、メディア王国から独立してアケメネス朝を建てた**キュロス大王**は、最初**スサ**に都を建設しました。しかしメディアの都**エクバタナ**や、新バビロニアの都**バビロン**も、都として使われます。王は、夏には高原のエクバタナ、冬には平地のバビロン、春にはスサに移動したのです。

2代カンビュセスが殺されたあと、各地の反乱を平定した**3代ダレイオス**は、スサの東方に大規模な宮殿の建設を開始しました。ペルシアでは、3月の**春分の日を新年として祝う**習慣があり、この新年祭には帝国各地の諸民族代表が、大王に朝貢します。その儀式の場として特別に作られたのが**ペルセポリス**です。つまりペルシアの宮廷は、バビロン(冬)⇒ペルセポリス(新年)⇒スサ(春)⇒エクバタナ(夏)と移動したことになります。確かにペルセポリスは、夏を過ごすには暑さがきつすぎる！



バスが遺跡入り口に着きました。入り口には大型観光バスが乗り付け、土産物屋が並びます。大音量の音楽がかかっていて、雰囲気ぶち壊しです。まあ、観光地というものは、どこでもこんなものです。チケットを買って中に入ると、静寂が支配します。木立を抜けると空間が開け、前方に、こういう光景が広がります。

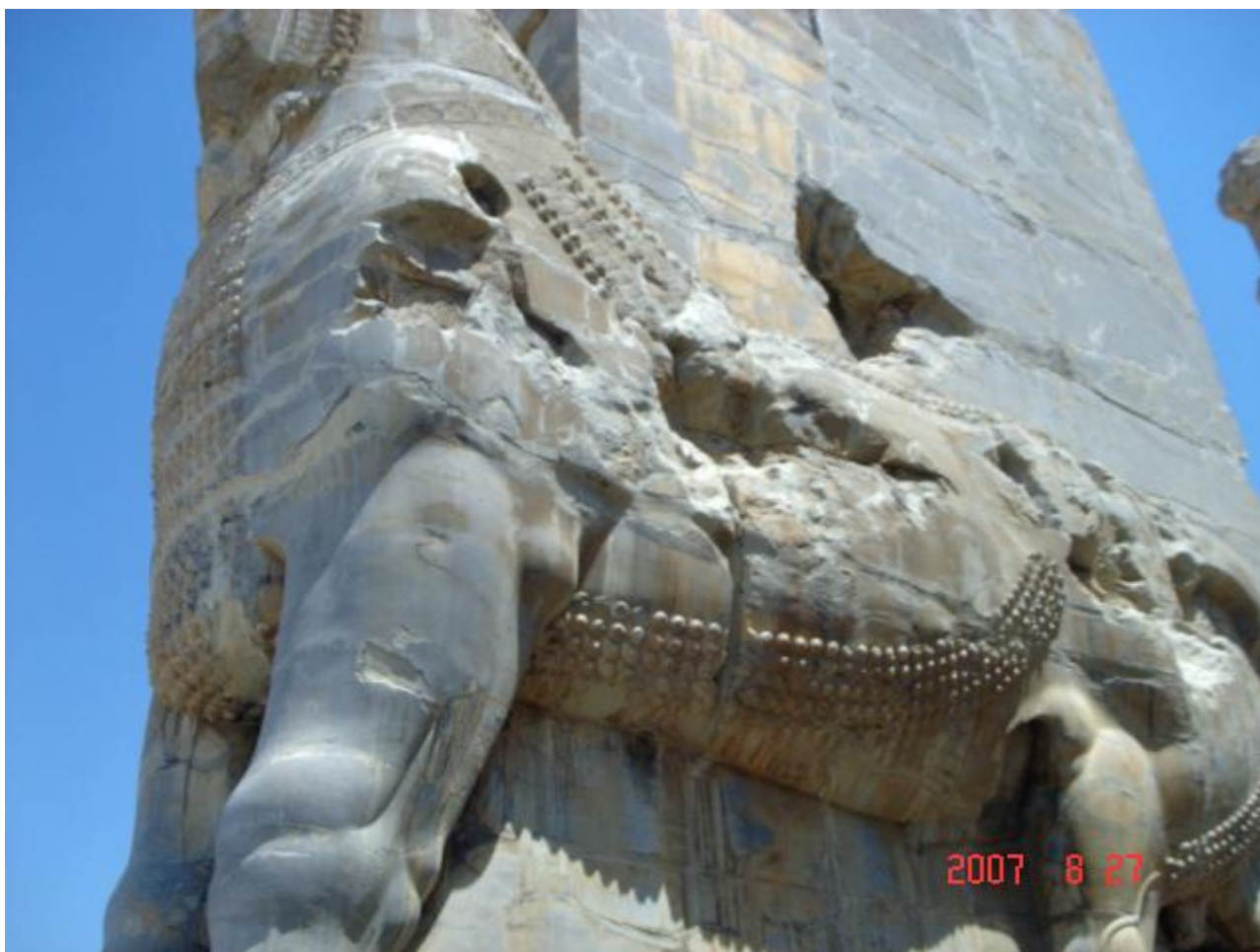


▲ ペルセポリス正面入り口。中央にクセルクセス門。その下に、左右に伸びる大階段。

正面が東です。春分の日には、正面の山から朝日が昇ります。もともとあった大地をうまく利用しています。大階段を登ることで、これから特別な場所に入るんだ、という気持ちになります。



▲ クセルクセス門。ペルセポリスの正面ゲート。



▲ クセルクセス門を守る怪獣。顔は、のちに偶像を嫌うアラブ人イスラム教徒が破壊した。

門をくぐって右手(南方)を向くと、謁見の間(アパダナ)。ダレイオス時代に、謁見の間とダレイオス宮殿が完成。次のクセルクセス時代に、クセルクセス門、百柱の間、などが増設されました。



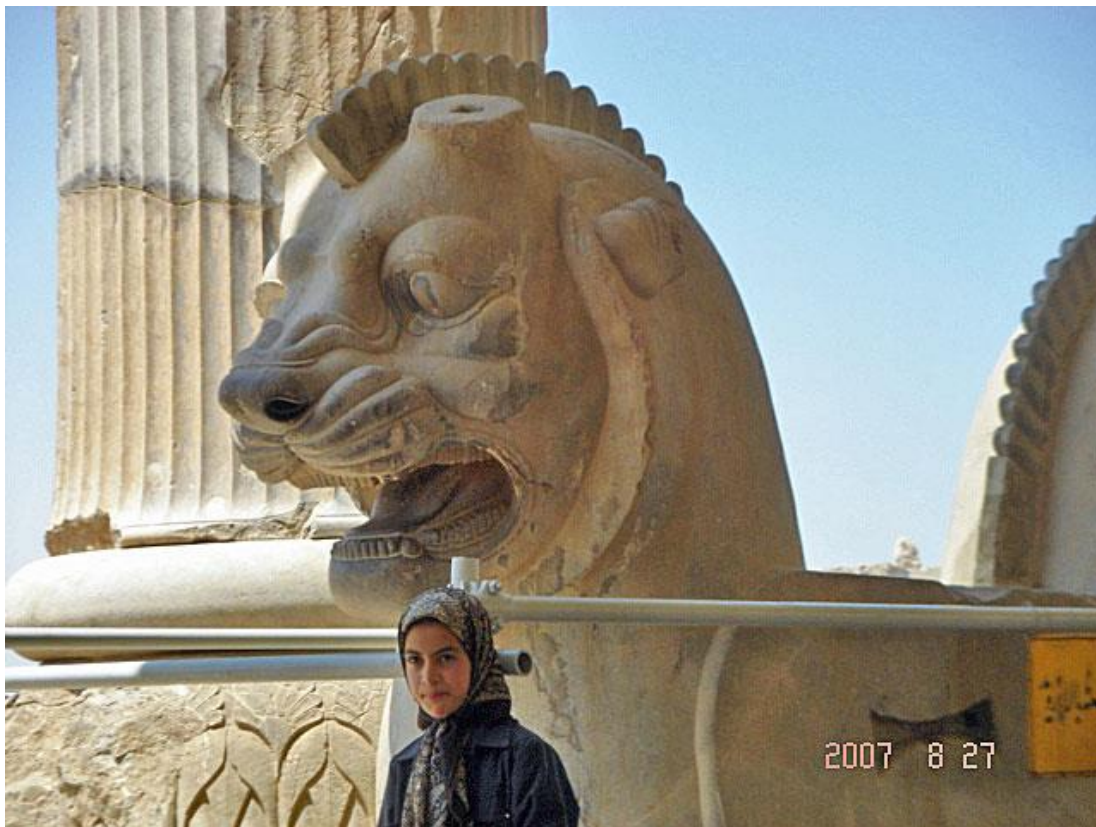
▲ 南方を望む。巨大列柱は、謁見の間。その奥の建造物は、ダレイオスの宮殿。



▲ 謁見の間(アパダナ)。破壊される前は、柱の上に木造の屋根があった。



▲ 謁見の間の柱。この柱の上に、木の梁はりを支えるライオンの柱頭があった。



▲ 柱の上に乗っていたライオンの柱頭。このでかさ！



▲ 謁見の間の門を守る人面怪獣。



▲ 玉座につくダレイオス(最上段)と、護衛兵たち(二段目以下)



▲ ライオンと戦うダレイオス。「王の猛獣狩り」は、オリエント美術で好まれたテーマ。



▲ 謁見の間、正面。謁見の際、ダレイオスがこの上に立った。上段に、王権のシンボル、有翼日輪がある。下段の士兵たちは、中央を向いて整列している。



▲ 牡牛おしを襲うライオン。牡牛座は「冬」、しし座は「春」のシンボル。立春を意味する。



▲ 楔くさび形文字の碑文。ドイツ人グローテフェントが解読した。



▲ 朝貢使節たち。遺跡の石材は黒大理石。磨けばこのように黒光りする。



▲ 北から見た謁見の間。よく見ると、柱を切断しようとした傷がたくさんある。

「百柱の間」の柱は、すべて根元から切断されていました。エジプトのピラミッドを覆っていた石灰岩が、のちにイスラム教徒によってはがされ、モスクの建設に再利用されたように、ペルセポリスの石材の多くも、持ち去られてしまったのでしょう。それでも破壊できなかったものが、今日まで残ったわけです。



▲ クセルクセスの宮殿。兵士たちが中央を向いている。この上に、王がお出ましになる。



▲ 有翼日輪に乗る**アフラ=マズダ神**。ゾロアスター教の最高神。よく破壊されなかったものです。

紀元前331年、**アレクサンドロス大王**がギリシア軍を率いてペルセポリスを占領し、黄金3000トン略奪。このギリシア軍占領中に、故意であったのか、偶発的であったのかはわかりませんが、宮殿は炎上し、廃墟と化しました。

伝説では、アレクサンドロス軍に随行したアテネの遊女(慰安婦)タイスが宴会の席で、「(ペルシア戦争で)アテネを焼いたクセルクセスの宮殿を、焼いてしましましょう！」とそそのかし、酔った兵士たちが放火した、という話になっています。

それから2300年。ここでは、時間が止まってしまったようです。

兵つわものどもが夢のあと

「で、アレクサンドロスのことを、イラン人はどう思っているの？ 侵略者？」

「彼はペルセポリスを破壊しました。でも彼は、…偉大な男ね」とガイド氏。

歴史上、何度も異民族の支配を受けてきたイラン。そのようなことには、免疫ができているようです。

ここで発掘された国宝級の遺物は、首都テヘランの考古学博物館にあります。遺跡の中の博物館には、土器がおいてあるだけです。



▲ ペルセポリスの全体像。



▲ 破壊される前のペルセポリス。 <http://persepolis3d.com/>



▲ おまけ。ツアーの同行客で、テヘランから来たという若夫婦の2歳のお嬢さん。「写真、取らせて」とお願いしたら、だっこさせてくれました。お茶とかピスタチオとか、いろいろごちそうになりました。

(071028 更新)